

令和元年5月24日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03365

研究課題名（和文）文芸諸ジャンルにおけるリアリティ表現の比較に基づくリアリズム概念の総合的再検討

研究課題名（英文）Comprehensive re-investigation into the notion of realism based on comparative analysis of representations of realities in various artistic genres

研究代表者

田中 純（Tanaka, Jun）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10251331

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 15,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においてはまず、写真や映画、音楽にまで分野を広げてリアリズム概念の歴史的分析を試み、とくに社会主義リアリズムの国際比較を行なった。さらに、R・バルトの「現実効果」概念の思想的吟味にもとづき、現代美術やマンガにおける現実空間再現の方法、身体芸術における「身振り」の情動喚起作用、劇場空間の仮想的現実性といった観点から、リアリティ表現の技法が身体に与える効果を考察した。これらを踏まえ最終的に、現代のメディア環境下における現実感覚の変容とその表われとしての文芸のリアリズムを、芸術作品の再制作やジェンダー論的身体論などといったトピックを通じて探究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代社会では人間を取り巻くメディア環境が急速に変化し、それともなってメディアによって媒介されたイメージと現実の境界が曖昧になるなど、何がリアリティであるのか、何を現実と見なすのか、という問題がさまざまな局面で生じている。文芸諸ジャンルにおけるリアリズムを再考した本研究は、現実をいかに「現実的」なものとして表象するかというリアリズムの技法やその効果の歴史的分析を踏まえ、現在のメディア環境下における現実感覚の変容やそれに応じた芸術作品の変化を多面的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This project started with a historical analysis of the notion of realism in wider fields of arts including photography, film, and music, with a particular focus on international comparison of the different forms of social realism. It also critically inspected the notion of “reality effect” (R. Barthes) against the history of thoughts, as it examined how bodies are affected by the techniques of expressing realities, taking various examples such as the ways the reality space is (re)constructed in contemporary arts and manga; the affective power of gestures in performance and bodily art; or the virtuality of the reality of theatrical space. Drawing on the results of these examinations, the project then further widened its scope to include such topics as refabrication of artworks and theories of gendered bodies, to investigate the shift in our sense of reality in the contemporary media environment and how it has expressed itself in the artistic fields as realism.

研究分野：思想史

キーワード：リアリズム リアリティ イメージ 情動 再制作 ポストメディアム 社会主義リアリズム 現実効果

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者である田中は、写真というメディアと近代の歴史叙述との関係を探る研究を通して、歴史叙述が写実主義文学と共通して有する「現実効果」(ロラン・バルト)をもたらす細部描写が、写真によって発見された知覚と深く関係していたことを見出し、写真図版を多用した作家W・G・ゼーバルトの「文学的歴史記述」としての散文のうちに、フィクションにいかに関与性を与えるかという問いに答えようとする、いわゆる「ポストメディア状況」(ロザリンド・クラウス)下での文学の「リアリズム」を認めるにいたった。そして、田中はそこから遡行的に、文学・芸術の諸ジャンルにおいて独自に定義されてきた「リアリズム」および「リアリティ」の表現を比較し、歴史的な相互関係と相互作用を検証するとともに、受容者にリアリティの感覚を与える作品の機制を、ジャンルを横断して総合的に明らかにする本研究の着想を得た。

本研究の代表者および分担者、連携研究者の専門領域は欧米・ロシア・東欧・中国・日本の文学・演劇・美術(写真含む)・音楽・映画・哲学・フェミニズム/クィア理論に亘り、時代的にも中世から現代に及んでいる。このように幅広い分野の研究者が緊密に連携することにより、本研究においては、広範な地域と時代に亘るリアリズム概念の歴史的検証と比較が可能となると期待された。本研究は、この基礎のうえに、現在のあらたなメディア環境下におけるリアリティ表現の分析を展開し、その成果にもとづき、「リアリズム」を総合的に再検討することを目指す研究として構想された。

### 2. 研究の目的

本研究は次の3点の解明を目標とした。

- (1) 文学・芸術諸ジャンルおよび異なる文化圏における「リアリティ」および「リアリズム」概念をめぐる、とくにジャンル間・文化圏間の相互関係・相互作用に重点を置いた歴史的分析
- (2) 文学・芸術諸ジャンルにおける「リアリティ」の効果をもたらす技法の比較とそこに通底する機制の探求
- (3) 現在の技術環境・情報環境下におけるリアリティ感覚の変容と、それに応じた文学・芸術の表現手法の変化、とくに複数のメディアが領域横断的に駆使されるポストメディア状況におけるリアリティ表現の分析・展望

### 3. 研究の方法

それぞれのテーマの解明は次に挙げるサブテーマに沿って行なわれた。各サブテーマごとに複数の担当者を決め、国内外から研究者を招聘した研究会やシンポジウムを通じて研究上の情報を交換し、議論した。

- (1) リアリズム概念の歴史的分析【平成28年度に実施】  
文学・芸術におけるリアリズムの系譜学  
社会主義リアリズムの国際比較  
リアリティ/リアリズム概念の思想史的検討
- (2) リアリティ効果の技法【おもに平成29年度に実施】  
リアリズムにおける「現実効果」の諸相  
演劇・オペラ・映画におけるリアリズムの技法分析  
反転したリアリズムとしてのユートピアの表象
- (3) リアリティ感覚の変容とポストメディア状況下のリアリズム【おもに平成30年度に実施】  
ポストメディア状況における「リアリティ」の理論と実践  
パフォーマンスのライブ性とリアリティ

### 4. 研究成果

リアリズム概念の歴史的分析に関しては、次のような成果を得た。

- (1) 文学・芸術におけるリアリズムの系譜学  
招聘研究者M・ポワヴェール氏による講演「写真におけるリアリズムの問題」やK・クルディ氏の講演「3・11以後の見えない現実をドキュメンタリーでいかに表現するか」およびワークショップ「リアリズムあるいは映画の夢と目醒め」により、写真や映画におけるリアリズム概念の系譜を批判的にたどり、そのリアリティを支える機制を多面的に探った。  
B・グロイス氏を招いて共催したシンポジウム『「アート・パワー」をめぐって』において、現代社会における政治的リアリティとアートとの関係について討議した。  
後小路雅弘氏による講演会「東南アジアにおける「美術」の誕生とリアリズム」を開催し、「美術」概念とリアリズム表現の歴史的関係性について議論を深めた。  
現代中国文学におけるマジック・リアリズムなどを含め、20世紀以降の前衛文学の試みを「新しいリアリズム」の構築という視点から系譜学的に再検討したほか、ジャンル・フィクションにおいて「リアリズム」を成立させる排除の構造を検討した。  
音楽および演劇におけるリアリズム概念についての歴史的検証を進めた。  
漢字圏における「写実」の系譜を西洋由来の「リアリズム」との緊張関係のうちに分析した。
- (2) 社会主義リアリズムの国際比較

シンポジウム「社会主義リアリズムの国際比較」を開催し、社会主義リアリズムの制度と実践をめぐり、ソ連、中国、ユーゴスラヴィアの比較を行なった。

(3) リアリティ／リアリズム概念の思想的検討

ラテン語の res の意味論的重層性を検証するとともに、ジャック・ラカン固有の現実批判＝リアリズムに関する思想的検討を進めた。

ヨーロッパ中世の「リアリズム」を幅広く捉え直すことにより、「ミメシス」の理論を再検討した。

リアリティ効果の技法というテーマについては、次の成果を得た。

(1) リアリズムにおける「現実効果」の諸相

岩崎貴宏氏の講演を実施し、現実の建物を高い再現度で制作するその技法を手がかりに、現代美術におけるリアリズム表現について検討した。

J・ベルント氏の講演およびシンポジウム「マンガ×表象文化論」を通じ、マンガにおけるリアリズム表現の技法を分析した。

S・シモンズ氏によるニーチェの「忘却」の思想をめぐる講演および写真を中心とする広島の表象に関するシンポジウムを通じ、歴史表象におけるリアリティ表現を考究した。

バルトの「現実効果」論がもつ現代的射程をメディア環境などとの関係のもとに考察した。

インデックス的転写を意味と結びつけるシステムとして、19世紀リアリズム小説を再考した。

日本の言文一致と中国の白話文のリアリズム表現に潜む音声中心主義的な再現 - 表象観を分析した。

(2) 演劇・オペラ・映画におけるリアリズムの技法分析

G・ディディ＝ユベルマンの『蜂起』展における「身振り」表現への着眼を身体芸術におけるリアリズム技法と関連づけ、水族館劇場主宰・桃山邑氏との討議を通じ、演劇におけるリアリズム／反リアリズムについて考察した。

P・ファルギーエール氏のテアトロ・オリンピコをめぐる講演を通じ、劇場空間がリアリティを構築する方法について検討した。

1960年代以降のオペラ演出がどのような方法によってリアリティを確保しているのかを演劇分野と連携しつつ分析した。

モンタージュとワン・ショット・ワン・シークエンスという二つの原理の拮抗と協働に注目し、映画におけるリアリズムを技法の側面から論じた。

リアリティ感覚の変容とポストメディアム状況下のリアリズムというテーマについては、次の成果を得た。

(1) ポストメディアム状況におけるリアリティの理論と実践

東京大学における宇佐美圭司作品の廃棄処分という事件を受け、このように破壊され消失した美術作品をポストメディアム状況下において再制作する方法やそこで追求されるリアリティについて考察した。

ジュディス・バトラーの来日を契機として、情動論やニュー・マテリアリズムの観点からのバトラー批判をポストメディアム状況下の「身体のリアリティ」変容との関連からとらえ返し、バトラー思想の再検討を行なった。

イメージのリアリティを問題とする「像行為論」の方法を吟味し、イメージの「实在」を焦点化するこのような理論的動向とポストメディアム状況との関係を考察した。

歴史理論における言語論から歴史経験論への展開を、歴史をめぐる「リアリズム」の趨勢としてとらえ、その背景にあるポストメディアム状況下の知覚経験を経験美学の知見を視野に収めて分析した。

(2) パフォーマンスのライヴ性とリアリティ

音（楽）情報のネットワーク化による、リアルタイムの音響の発信や瞬時的変換といった操作による、音の「ライヴ性」そのものの変容をめぐり、サウンド・スタディーズの視点からの作品分析を行なった。

安価なデジタル機器でパフォーマンスを立ち上げたり、脳科学や神経科学とのコラボレーションによってインスタレーション作品を作るアーティストたちの諸実践の経験美学的な分析を援用し、デジタル環境におけるリアリティとは何かという問題へのアプローチを試みた。

上記のような研究成果は研究代表者および研究分担者の研究にフィードバックされ、それぞれの発表論文などに随時まとめられている。研究代表者である田中は、これまでの研究成果を踏まえた討議の場として、2019年5月にドイツ・フンボルト財団の資金提供により開催された国際シンポジウム「フンボルト・コレク東京 神経系人文学と経験美学」を企画した。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計69件)

田中純「歴史のゴースト・プラン 宇佐美圭司の思想の余白に」、『UP』557、査読無、2019、

37-44。

Kohei KUWADA 《L'inquiétante étrangeté -- le motif de l'eau dans l'œuvre de Pascal Quignard》、『Littera』4、査読有、2019、39-48。

田中純「不死のテクノロジーとしての芸術 生政治のインスタレーション」、『UP』554、査読無、2018、46-51。

田中純「物質論的人文知（ヒューマニティーズ）としての「野生の考古学」 同時代への退行的発掘のために」、『現代思想』46（13）査読無、2018、150-159。

加治屋健司「グロイスにおける芸術の制度と戦後日本美術」、『思想』1128、査読無、2018、87-99。

Lin Shaoyang, "Redefining the Late Qing Revolution: Its Continuity with the Taiping Rebellion, Radical Student Politics and Larger Global Context", *Frontier of History in China*, 2018, 13(4): 531-557. 査読有。

乗松亨平「孤独の（不）可能性：グロイス／カバコフの共同アパートをめぐって」、『思想』1128、査読無、2018、56-71。

内野儀「集会(アセンブリ)としての演劇／劇場 シアターコモンズ'18のために」、『シアターコモンズ'18 Report Book』、査読無、2018、44-49。

〔学会発表〕(計 46 件)

加治屋健司「宇佐美圭司《きずな》の廃棄と画像の再制作」、国際シンポジウム「現代美術の再制作／再構築 保存修復の観点から」、2019。

Kohei KUWADA 《Encore quelques sordidissimes》、国際シンポジウム「旅、ことばからことばへ：パスカル・キニャールと文学のアトリエ」、2018、於・日仏会館（東京）国際学会。

Kyohei Norimatsu, "Friendship in 'Dark Times': Moscow Unofficial Art after 1968," Workshop of Literary Theory Committee of the International Comparative Literature Association (国際学会) 於ニューヨーク大学アブダビ校(アラブ首長国連邦) 2018。

UCHINO, Tadashi, *Theatre of the Tourist in the Age of Mobility: Kamisato Yudai and Choy Ka Fai (revised)*, 第 20 回台北芸術祭、2018。

SHIMIZU, Akiko, "Marriage Equality as Strategy: Family Registration, Moral Conservatives, and the "LGBT" Fad in Japan"(国際学会、招待登壇), 2018, "Queering Japan" Conference" Haus der Universität Düsseldorf、ドイツ、デュッセルドルフ。

Yosuke Morimoto, 《Pachet, ce maître de l'attention (littéraire)》, Pierre Pachet ou l'essai autobiographique et les avancées de la littérature, 2018, 招待講演、国際シンポジウム(於明治大学)

〔図書〕(計 29 件)

清水晶子、中央大学人文科学研究所編『読むことのクィア-続・愛の技法』(第9章「ピサイドのクィアネス-イヴ・セジウィックにおける接触」pp. 201-22 執筆担当) 中央大学出版部、2019、全 222 頁。

林少陽『鼎革以文：清季革命與章太炎「復古」的新文化運動』、上海人民出版社、2018、全 408 頁。

Kohei KUWADA, Kazuhiko Suzuki, 《Lettres japonaises》、Les mondes de Gérard Macé, *Le temps qu'il fait*, 2018, 全 224 頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：長木 誠司

ローマ字氏名：CHOKI, Seiji

所属研究機関名：東京大学

部局名：総合文化研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：50292842

研究分担者氏名：高橋 宗五

ローマ字氏名：TAKAHASHI, Sogo

所属研究機関名：東京大学

部局名：総合文化研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：10134404

研究分担者氏名：内野 儀

ローマ字氏名：UCHINO, Tadashi

所属研究機関名：学習院女子大学  
部局名：国際文化交流学部  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：40168711

研究分担者氏名：一條 麻美子  
ローマ字氏名：ICHIJO, Mamiko  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：総合文化研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：30213987

研究分担者氏名：清水 晶子  
ローマ字氏名：SHIMIZU, Akiko  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：総合文化研究科  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：40361589

研究分担者氏名：林 少陽  
ローマ字氏名：LIN Shaoyang  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：総合文化研究科  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：20376578

研究分担者氏名：桑田 光平  
ローマ字氏名：KUWADA, Kohei  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：総合文化研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：80570639

研究分担者氏名：乗松 亨平  
ローマ字氏名：NORIMATSU, Kyohei  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：総合文化研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：40588711

研究分担者氏名：森元 庸介  
ローマ字氏名：MORIMOTO, Yosuke  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：総合文化研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：70637066

研究分担者氏名：加治屋 健司  
ローマ字氏名：KAJIYA, Kenji  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：総合文化研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：70453214

## (2)研究協力者

研究協力者氏名：加藤 有子  
ローマ字氏名：KATO, Ariko

研究協力者氏名：亀田 真澄  
ローマ字氏名：KAMEDA, Masumi

研究協力者氏名：堀 潤之  
ローマ字氏名：HORI, Junji

研究協力者氏名：畠山 宗明  
ローマ字氏名：HATAKEYAMA, Muneaki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。